

子どもによる子どものためのインタープリテーション

河内 直子 (Amamo Works)

キーワード：海辺の環境教育、海洋プラスチックごみ、北海道

1. はじめに

北海道厚岸郡浜中町に位置する浜中町立散布（ちりっぷ）小学校は、道東の漁業が盛んな集落にある小さな小学校である。子どもたちの大半が漁業従事者の家庭ということもあり、豊かな海辺環境を生かした海洋教育に力をいれている。発表者は、2020年からこの学校の海洋教育の一環として、海洋プラスチックごみに関するプログラムの実施に携わってきた。3年目を迎えた2022年からは、すでにプログラムを体験している高学年の子どもたちに、低学年の子どもへのレクチャーを任せることにした。この発表では、発表者が取り組んでいるプログラムの概要と、それを受けて子どもたちが子どもたちのために取り組んだインタープリテーションについて報告する。

2. プログラム概要

散布小学校は複式学級の学校である。プログラムは3~4年生のクラスと5~6年生のクラスを対象に以下のような流れで行った。

- 1) 海辺での注意事項の共有
- 2) 海岸で「この浜にあってほしくないと思うもの」を10分間で拾い集めてもらう。「ごみ」という言葉はこの時点では使わない。
- 3) 拾ったものを分別してみる。
「海のもの」vs「山のもの」
「自然のもの」vs「人工のもの」
「土に還るもの」vs「還らないもの」
- 4) 土に還るかどうかについて、実際のプラスチックごみの数字などを示してレクチャー。
- 5) 終わったら海辺で生きもの観察会をし、最後に海へのお礼として再度ごみ拾いをする。
- 6) 学校に持ち帰って、プラスチックごみを減らすために何ができるかを子どもたちに考えてもらい、「散布小エコ宣言（※この名称も子どもたちが決定）」としてまとめてもらう。

2020~2021年は4)のレクチャーを発表者が実施した。2022年のプログラムを検討するにあたり、すでにこのプログラムを2回受けている5~6年生がいることから、5~6年生に3~4年生へのレクチャーを任せることにした。

プログラム実施日の1~2ヶ月前から高学年の子どもたちと準備をし、必要な資料は発表者が用意して解説した。担任の先生を中心にプレゼンテーションを作ってもらい、発表者を中心としたスタッフと一緒にブラッシュアップして本番に臨んだ。

3. 結果

小学生にインタープリテーションに取り組んでもらう試み、大丈夫かなと心配になったりもしたものの、最終的にはそれは杞憂に終わった。事前準備を通じて、子どもたち自身が「子どもはクイズが好きだからこの説明はクイズにしよう」「この説明には地球儀を使おう」といった解説のアイデアをどんどん出してくれただけでなく、タイプミスをした紙芝居を「この紙芝居を作り直してラミネートするとまたひとつプラスチックごみが出る」とつかみにしてしまうな

ど、大人顔負けの発想で低学年向けのプレゼンテーションを作り上げた。子どものことは子どもがいちばんよく知っているという当たり前のことに改めて気づかされた。

そして、2023年春、その発表を聞いていた当時の4年生が5年生になり、発表する側になった。同様にプレゼンテーションを作るための事前授業に行ったところ、前年の発表の内容をきちんと理解し、細かい数字まで覚えていることに驚かされた。それだけではなく、自分たちで海洋プラスチックごみの問題についてアンテナを張ってリサーチし、情報過多を恐れてこちらが説明してこなかったような内容にもついても知りたいと要望が来るようになった。インタープリテーションに取り組んだことで、発表した子どもたちの「知識の定着とさらなる理解の促進」が図れたばかりではなく、聞き手となった子どもたちにも「自分事」として受け止める効果があったのではないかと感じている。

4. 結びに

このプログラムを開始した当初から、いずれは何らかの形で子どもたちに学んだことの発表の場を作り、知識を定着させ、かつ下級生や地域コミュニティに学んだことを循環させる仕組みを取り入れたいと考えてきた。2022年、その「サイクル」づくりの最初の一步を、期待していた以上の形で踏み出すことができた。受け入れてくださった散布小学校の先生と児童の皆さんにまずはお礼を申し上げたい。

散布小学校の子どもたちにとって、海は「将来自分の生業の場となる場所」であり、その環境変化への関心はとても高い。海ごみや気候変動といった課題に対して、正しい情報を知ってもらうだけではなく、絶望せずに自分ができることに取り組めるよう、未来志向なプログラムを今後も実施していきたいと考えている。